岡山大学大学院医歯薬学総合研究科　病態制御科学専攻
腫瘍制御科学講座　免疫学分野
中山睿一教授　退任記念集

「Scientist」

川崎医科大学呼吸器内科
大植　祥弘

川崎医大呼吸器内科OBであり義兄でもある矢木晋先生の勧めで、川崎医科大学呼吸器内科の岡三喜男教授とのご縁を頂き、この岡山に来てもう五年目になります。

「人は宿命に生き、運命に出会い、使命を感じ、天命を全うす」と言いますが、私は医師という人生の宿命に生き、様々な運命的な出会いがあってこの岡山にいます。岡山に来た当初は、自分の使命が何であるのか感じられずにいました。しかし使命などという大それた事は当時の私には分かるはずもありません。

近畿大学より川崎医科大学に移り二年間、岡教授のご指導のもとがん診療や緩和医療の分野を主に勉強させていただきました。岡山へ来て三年目の平成二十年より川崎医科大学大学院に進学し病理学教室での短期研修の後、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科　免疫学教室の中山睿一教授のもとで特別研究生として、がんワクチン療法の開発研究に従事してきました。

当教室では「新規がんワクチン療法の開発」という大きな、大きなテーマを頂き、基礎および臨床の両面より研究を行わせていただきました。「人には予期や意図せぬ出会いが幾つかあり、それが貴重な出会い」と、岡教授より教えていただいてきましたが、自分がこの岡山の地で腫瘍免疫学を学ぶことなど全く想像もしていませんでした。なぜなら・・・学生時代、唯一勉強を真面目にやらなかったのが免疫学だったからです（医学の中で嫌いな分野は無いのですが免疫学については学生生活に忙しくテストのための勉強しかしませんでした）。医学を志す者は、諸先輩の英知を余す所なく学ばなければ、いつかツケがまわってくるのだと実感した時でした。

中山教授は、腫瘍免疫学分野の第一人者であり世界最先端の領域を研究され、教科書に書かれている内容の裏の裏、はたまた未解決な部分や解決に至る可能性など非常に多くのことを勉強させていただきました。抄読会では、Nature、Science、Cellなどトップジャーナルを輪読し、最先端の知識の修得と共に世界的視野も学ぶ事が出来ました。「なぜ、自分がこの場にいるのか？」「人生にとって、どのような意味があるのだろうか？」と常に感じる日々でした。二年間の研究内容も、日本国内の学術集会でシンポジウム、ミニシンポジウムと大きく取り上げていただき、また国外では米国癌学会（AACR）に発表させていただき多くの方から賞賛を頂いた事は、研究内容の重要性を肌で感じる期間

でもありました。新しい仲間にもたくさん巡り逢うことができ与えられたテーマと中山教授からの叱咤激励に、毎日夜遅くまで真理に向かって語り合うその楽しさは言葉では言い表せません。人には（特に私には）煩悩がありますので、ついつい目先のことに囚われてしまいますが、知的欲求を満たすことがこれほど快感であったとは思いもよりませんでした。

中山教授は、「我々scientistにとって必要な要素は、meticulous, eccentric, carefulnessであり、さらに重要な事は“dedication”である」と常々おっしゃっています。 eccentricに関しては自信があるのですが、この“dedication”は全く自信がありません。「今日はしんどいから明日に実験しよう・・・」「今日は家族とゆっくり過ごそう・・・」などという甘い誘惑は、そこら中に散らばっていて“scienceにdedicateする”ことが如何に困難であるか・・・また、如何に恐ろしい呪いの言葉となって私を襲ってくるか・・・ということを思い知らされる日々でした。“science”は、簡単には微笑んでくれません。時には、努力しているつもりでも微笑んでくれません。実験がうまくいかなかった日などは、風呂の中で自分の行いを見つめ直し、“scienceにdedicateできなかった事”を一つ一つ思い返し、反省し、懺悔し・・・まるで修行僧もしくは修道士になった気分です。人より努力しなければ、人が寝ている時に努力しなければ、欲を出さず、ただただ真理の探究と、人類にとってより良き務めをなす事のみを願って、“scienceにdedicate”して、初めて“scientist”になれるのだと感じました。

平成二十二年三月、研究をご指導いただいた中山教授は岡山大学大学院を御退任され、四月から川崎医療福祉大学の教授に御就任されます。また川崎医科大学呼吸器内科　岡教授と中山教授との共同研究が開始され、がんワクチン療法の臨床開発と研究を行う「免疫研究室」が併設される事となり、岡山大学で共に学んだ仲間も川崎医科大学呼吸器内科に移籍もしくは国内留学をして研究を継続します。当研究室の立ち上げに携われたことは、自分にとって大変貴重な経験となりました。我々の研究が、実を結ぶのもここ数年の努力に懸かっています。少しずつですが、着実に前進しています。

筆者：左端最前列

岡山へ来て五年目になりますが、ようやく中山教授が歩まれてきた“scientist”の一人として生きてみたいと、自らの使命を感じられるようになりました。これからも中山教授に“science”という空に向かって、我々という飛行機を操縦し、真理が眠る星々に導いていただきたいと思います。